10 Years After

10 Years After

10Years After
1 雪の惨劇

飛鷹 隼
Jun Hiyoh

T★NOVELS
Fantasia

10 Years After

大きな支えは いつも瞬間 通り過ぎてくだけ
小さな苛立ち 煙草の煙と共に宙を舞い そして忘れる
過激も刺激じゃなくても 生まれてここまで来たこと
喜べる 一人でいる時 少しは感謝出来るかい？
ten years after, where will we go?
僕等は何処で 頭を悩ませ傷ついているんだろう
ten years after, where will we go?
あいつは何時まで 体を痛めて走り続けるのだろう
tem years after, where will we go?
金と銀と鉄のアクセサリー 飾りは全てなんだったのか
ten years after,where will we go?
温もりはこの頃 何だか近くに転がっていた————

10 years after(TM NETWORK)
作詞／作曲／編曲　Tetsuya Komuro

カバーデザイン　神奈備祐哉

10 Years After

第一章
巡洋警備艦「アースラ」

第９管区に所属する全ての警備艦艇（P/V）に対して最優先（フラッシュ）の任務変更命令が下されたのは二時間前の事であった。

数ヶ月前より活動が顕著化しつつあった亜空間断層（ハイパーレイヤー）の歪みがついに限界点を突破し、巨大なエネルギーの海嘯（つなみ）が管轄下にある超弦回廊内部――幾つかの時空間航路で荒れ狂ったのだ。

次元震の発生から四時間、現状は尚大荒れの状況が続いているものの、それでも大型艦艇の航行が不可能になるほどではなくなっていた。

そのため、該当する航路内で被害を受け、航行不能に陥っているワープ船の救助任務（レスキュー）の実施が速やかに求められたのである。

その中でも、とびきりに厄介な現場――亜空間断層の崩壊地点に近く、今なお激しい空間乱流（エネルギーストリーム）が断続的に打ち寄せてくる為機動警備艇（MBL/P）や沿海域警備艦（P）では接近が不可能な時空結節点付近で遭難した定期航路貨客船「フロンティア・ユニヴァース」号の救援に派遣されたのが巡洋警備艦（CP）「アースラ」であった。

「航海（ナヴィ）、艦長（キャプテン）。本艦、間もなく『ユニヴァース』号遭難地

点に到着」
「艦長了解。電測、救難対象の状況どうか」
「アイ、艦長。レーダー観測では船体の分断等はありません。ただし、推進剤タンクより流出した重水素と思われる霧状物質が周囲に拡散しつつあり、反応は良好とは言えません」
　レーダー・レピーターのモニターを睨みつける電測員の報告に、誰にも聞き取れないほど小さな舌打ちと共に了解の返事を返した艦長は、忌々しげな様子で未だ激しい調子でエネルギーストリームが荒れ狂うメインモニター越しの外の景色を睨みつけた。
「機関室、距離一〇〇〇でエンジン停止。難船周辺に重水素が流出している。力行での接近は危険だ」
「機関室了解、相対距離一〇〇〇でインパルスエンジンを停止します」
「航海、転送ビームのロックオン圏内に入り次第、姿勢制御用ノズルより圧搾空気を噴射して行き足を殺せ。総員、救難配置に着け」
　忌々しげな舌打ちをしつつも、為すべき事を決めた艦長は矢継ぎ早の命令を次々と下していく。
　間もなく、救難配置の掛った艦内を乗組員が駆け回る喧騒が響き渡り、メインモニターの視界に半壊した「ユニヴァース」号の船体が小さく見えてくるのとほぼ同時に、総員配置よしの号令が艦橋へと伝えられた。
　前任から艦を引き継いでまだ二ヶ月、完全に艦を掌握したとは言い切れない艦長だったが、前任艦長の下で鍛えられた乗組員の練度には十分な満足を覚え、小さく首肯くと再び命令を発する為に口を開いた。
「通信、『ユニヴァース』号に打電、『我時空管理局警備艦“あーすら”、現在貴船難船海域到着、只今ヨリ救難活動ヲ開始スル。貴船現況ナラビ乗員・乗客人数、負傷者有無知ラサレタシ』」
　間もなく国際緊急周波数帯で応答があり、「ユニヴァース」号は竜骨が二ヶ所で断裂しており、その断裂の影響を受けて予想通り推進剤タンク一基が破壊、内部より重水素五〇トンが流出している事が明らかになった。
　また、「ユニヴァース」号には乗員二四名、乗客三七名の合計六一名が乗り合わせている事、乗員一名、乗客三名

が緊急の入院治療を必要としている事、乗客に妊婦一名、退船の際介助の必要な老人四名、乳幼児二名が含まれる事が伝えられてきた。

「解りました。では、重傷者、老人・妊婦・小児、女性船客、男性船客、そして乗組員の順で転送収容を行ないます。その後、残念ですが船体放棄の上自沈処理を行なわざるを得ないと思います。また、積荷、船室内にある私物に関しては諦めて戴くしかない事をご了解願う旨説明をお願いします」

『了解した。それと、船体が捩れた際に隔壁が固着し、孤立状態になった区画がある。そこに船員一名と乗客五名が閉じ込められているようだ。センサー情報では配管の一部が破損し、エアコンの送気が止まっているから、空気の状態が心配だ。なるべく急いでそこの連中から助けて欲しい』

「了解です、ではこれより転送作業の為の予備センシングを行ない、転送シグナルのロックオンを行ないますので全員現位置で待機をお願いします」

「アースラ」の通信士と「ユニヴァース」号の船長との間で慌ただしく状況の確認と作業の段取りについてのやりとりが行われ、船長の「了解、待機する」の一言を受けた通信士が斜め後方にある艦長席を振り返り、小さく首肯いて艦長に合図を送る。

「これより目標の転送作業の為のセンシングを実施します。ニュートリノセンサー作動」

通信士の合図に艦長が黙って首を縦に振ったのを確認した電測士の手がコンソールの上を走り、タッチパネル上でクリックの時を待っていたアイコンの一つに指が触れる。

間もなく、「アースラ」の上部構造物中段に取付られたニュートリノセンサーのターレットがゆっくりと首を振り、ほの青白い光が嵐に痛めつけられた無残な「ユニヴァース」号をなぞっていく。

だが――

「あ、畜生……やっぱり駄目か」

はっきりと周囲に聞こえる舌打ちの音と共に、だが、予め予想はしていたと言わんばかりの様子で艦長席を振り返りながら電測士が怒鳴った。

「艦長、目標の周囲に充満してる重水素とニュートリノが

干渉して精密なセンシングが阻害されてます。もう少し距離を詰めて、重力場スキャンを掛けるしかありません」

限りなく中間子質量がゼロに近く、それ故にいかなる物体をもすり抜ける事が可能で、更に物体を透過する際に微弱な放射光を出す特徴を持つニュートリノを用いたニュートリノセンサーは遠距離からのセンシングに最適な装備であったが、目標である「ユニヴァース」号と「アースラ」の間に撒き散らされた重水素の雲がニュートリノと激しく干渉してしまい、転送作業に必要な精密な目標情報を得るにはあまりにも観測データに「ノイズ」が多すぎて役に立たなくなってしまったのだ。

それに対し、艦長が何かを口にするよりも早く気象情報をモニターし続けていた気象観測士が大声を張り上げる。

「まずいですよ艦長！断層の活動が再び活性化、中規模の振動が立て続けに発生しています。それに伴うエネルギーストリームの発生を確認、第一波の本艦到達まであと二六〇秒！」

「エネルギーストリームの規模は？」

「スケールレベルⅥ。本艦は耐えられますが『ユニヴァース』号が耐えられるかどうかは……」

気象観測士の報告を受けた艦長は暫し瞑目して思考を巡らせたが、やがておもむろに目を開くと航海長の方を振り向いた。

「艦をエネルギーストリームの正面に立たせる。本艦の船体で壁を作って、大波を逸らすんだ」

その言葉に、さすがに航海長も控えめながら反論する。

「ですが艦長、確かにレベルⅥのストリームなら本艦も耐えられますが、救助作業が長引いた場合、あるいはより大規模なストリームが発生した場合、本艦の安全を保障することは怪しくなります」

「解ってる……だが、だからといって船の沈没の恐怖に怯えながら救助を待つ六一名もの人々を更に危険に晒していい訳でもあるまい？それでは俺達が彼らの払う税金で養って貰っている意味も無くなる。俺はこの艦の指揮を執るようになって日は浅いが前任艦長の下で鍛えられた乗組員なら間違いなくこの状況を対処出来ると信じる。やるんだ」

普段は寡黙に、年齢以上に落ち着いた様子しか見せない

艦長がこの時ばかりは普段の無表情な寡黙さをかなぐり捨てていた。そして同時に、その意思が不動のものである事を何よりも鋭い眼光が雄弁に物語っていた。

為に、僅かな間ではあるがその強烈な視線と正面から向き合った航海長は自分から視線を逸らすと、やれやれとばかりに肩を竦めた。

「了解です。本艦を風上に立て、船体を傾斜させ、シールドと防御プレートを曝露部に集中させて船底全面でストリームを受け流しましょう。その方が効率もいいし船体の受けるストレスも最低限で済ませられます」

「シールドと防御プレートの強度を考えれば、船底よりもむしろ上部で受ける方がいいのではないか？」

「ええ、強度上は確かにそうです。ですが、上部でストリームを受け続け、強度限界を越えた場合まず艦橋を含む上構が圧壊する恐れがあります。また、本艦のセンサーやアンテナ類も上部に集中していますから船体よりも強度的に劣るそれらの装備品が早い時期に破壊された場合、作業に支障を来す恐れが十分にあります。これらは避けるべきリスクと判断します」

艦の安全と艦長の命令を天秤にかけ、ぎりぎりのところでそれが出しうる最良の結論である事を航海長が理路整然と説明すると、艦長も納得の印に小さく首肯き、その提案を受け入れた。

「よろしい、本艦を風上に回り込ませろ。ストリームに直角に遷移し、船体を左舷に一四度傾斜。第一の波をやり過ごし次第重力場スキャンを実施する。ストリームの直撃時には船体が波に相当に押されることになるぞ、『ユニヴァース』号との相対距離の維持に厳重注意」

「ストリーム、第一波到達まで後一八〇秒、第二波到達まで二九〇秒、第三波到達まで四四〇秒です」

艦長の命令に被さるようにして気象観測士が叫ぶ。その声に背を蹴飛ばされたかのように艦の後方から圧搾空気が勢いよく噴射する轟音が響き、同時に船体が緩やかに左舷へと傾き始めた。

インパルスエンジンの噴射に比べるならば非常にのろのろとした歩みではあったが、それでも「アースラ」の一四〇〇〇トンの巨体が緩やかな弧を描きながらぐるりと「ユニヴァース」号の脇を回り込み、傷ついた彼女をエネ

ルギーストリームの暴力から庇う為その前面へと立ち塞がる。
「本艦、ストリーム前面へ遷移完了。総員対衝撃防御、重力アンカー展開します」
「ストリーム第一波、直撃まで後五……四……三……二……一……来ます！」
直後、強烈な衝撃が足元から突き上がり、強烈なエネルギーの波が一四〇〇〇トンもの全備重量を誇る「アースラ」をまるで小船のように突き揺るがす。
とにかく舌を咬まないよう必死で歯を食い縛りつつ、固く締めたシートベルトが身体に食い込む苦痛に耐えながらストリームが行き過ぎるのを懸命に待つ。
暴力的なまでの自然のエネルギーが、そこにあったちっぽけな人工物など歯牙にもかけぬというように行き過ぎるのに要したのは僅かに四～五秒程度。だが、全身を支えながらその嵐に耐える人間にとっては永遠に思えるような時間だった。
そして、エネルギーの通過と共に嘘のように平静さを取り戻した艦橋で、胸元からこみ上げてくる何かを精神力で抑え込みながら艦長の命令が飛ぶ。
「第二波到達まで時間がないぞ、重力場スキャン、急げ！」
「アイ・サー！重力場スキャン、行きます！」
未だくらくらする頭を振って気分の悪さを振り払いながら、電測員の指がタッチパネルの一点を叩いた。直後、「ユニヴァース」号の内部では「ブン」と言う僅かな振動音と共に「アースラ」から放たれた重力場が船体をなぞり、中にいた人々はほんの一瞬、無重力状態に陥ったかのような錯覚と僅かな立ち眩みを覚えた。だが、それこそが正常に重力場スキャニングが行われた事を証明する物であると知っている僅かな人間は今まさに自分達が生還への階段を登り始めたのだと知って安堵の表情を浮かべる。
「重力場スキャン終了……目標ナンバー一から六一までマーク確認。事前の指示通りに優先順位をソートします」
「転送室、艦橋。転送パッド準備よし」
「艦橋了解。ただし、第一陣は緊急入院を必要とする者を転送する為、これは直接医務室への転送とする。医務室、患者の受け入れ準備はどうか」
「医務室、艦橋。準備は万全です、いつでもどうぞ」

第二波のエネルギーストリームの到達まで残された時間は幾らも無い。強烈なエネルギーストリームに小突き回された気分の悪さを訴えている暇など乗組員にはどこにもなく、気力でそれを抑え込みながら救助作業の準備は慌ただしく進められていった。

「第二波来ます……五……四……三……二……一……今！」

再び、強烈な衝撃。「アースラ」の船体が上下左右に激しく揺さぶられ、四方に展開された重力アンカーが震えながら懸命に船体を引き止める。

「第二波の通過を確認。第三波到達まで一五〇秒」

「ターゲット一から四まで転送開始……終了。続いて五から一一まで、転送準備に入ります」

鍛えられているとはいえ多くの乗組員はグロッキー寸前だ。だが、ここで弱音を吐く訳にはいかない事を承知しているからやせ我慢でこみ上げる吐気と戦いながら、彼等は懸命の救助作業に奔走している。

とは言うものの、エネルギーの到達の度に作業は中断を余儀なくされ、その度に乗組員のスタミナと精神力は大きく削ぎ落とされていく。これはまずったな……と艦長が少し眉を顰(ひそ)めた時、艦長席の端末の一角に不意に割込みのシグナルが燈った。

「なんだ？」

「兄さ……やなかった、艦長。一つ提案やねんけど、手の空いてる魔導士を外に出して圧力正面にシールドを展開させたらどないや。どうせ今んとこ、うちらはする事のうて暇や、精々収容した人らに差し入れ配って回るくらいしかする事があらへん」

「危険だぞ？」

「なに、別にエネルギーを全部食い止める必要はおまへん。艦のシールドの向こうにもう一面シールドを張って、それで圧力を和らげながらほんのちょっとエネルギーのベクトルを逸らしてやればええんや。そんだけでも艦が受けるプレッシャーは結構軽減されます」

モニターの向こうの相手――「アースラ」魔導分隊の分隊士を務める八神(やがみ)はやて上級執務官補の提案にほんの少し考え込む艦長。その提案と艦に乗組む魔導分隊の顔ぶれを脳裏に描きながら、ほんの短時間で結論を纏(まと)め上げる。

「よし、いいだろう。ただし外部は危険度が高い。ツーマンルールの維持を厳守で出てくれ。それと、シャマル医官は医務室に詰めて貰う必要があるから除外。残りのローテーションは一任する」

「了解や。あと、いけるんなら副長（ナンバーワン）もお借りします。こーいうミッションやったら副長の手が有るんと無いんとじゃ雲泥の差やから」

長い付き合いで慣れっこになっているとはいえ、相変わらず遠慮のないはやての言葉に微苦笑を浮かべながら、艦長はおもむろに副長の方を振り向いた。

その艦長の様子に、状況を察した副長が無言で首肯く。

「オーケーだ。では行ってくれクロノ。じゃあ頼んだぞ、はやて」

その言葉を聞くよりも早く、艦橋の背後にあるドアに向けて駆けていく副長――クロノ・ハラオウン二級執務正の背を目で追いながら、モニターの向こうのはやてに向けてほんの僅かに表情を和らげながら艦長は言った。

「はいな、了解です恭也兄さん」

故意か、それとも無意識のうちにか普段通りの呼び方で通信を締めたはやてに咎めの言葉を掛ける暇もなく、モニターはブラックアウトし、ふぅ、と思わず巡洋警備艦「アースラ」艦長、月村恭也（つきむらきょうや）一級執務正は溜め息を漏らした。

「やれやれ、大変ですねお兄さん」

口元に僅かに笑みを浮かべながら、状況を楽しそうに眺めていた航海長が恭也の方を振り向いて言った。

「全くだ……こんな事ならやはり父さんの後を継いで翠屋（みどり）のマスターになるんだったよ……」

思わず洩れた本気とも冗談とも付かぬ恭也のぼやきに、あははと苦笑で応じながら航海長、エイミィ・リミエッタ一級執務官は、だがそれで艦橋内部の士気が幾らか回復したのを気付かずにはいられなかった。

はやての提案は思った以上に効果を上げた。

なにしろ、管理局随一のやり手とその名も高い、人事部長レティシア・ロウラン直々に選抜された最高水準の魔導士ばかりを集めた「アースラ」魔道分隊である。過酷な割に地味でしかも危険な任務ではあったが、彼女達はそれを

完全にやり遂げていた。
魔導士隊の展開によって、それまではストリームの直撃の度に中断を余儀なくされていた転送作業が一気に進み、それから二〇分で転送作業は既に六度を数え、ほぼ半数の三〇人がこれまでに無事収容されていた。
同時に、エネルギーストリームの影響が軽減された事で重水素の吸着装置を搭載した内火艇（シャルボット）を発進させ、周囲に流出した重水素の回収作業も可能になった。
だが、順調に続くと思われていた作業も、第一一波のストリームが到達した直後に新たな困難にぶち当る羽目になってしまう。
「なんてこった……」
「どうした？」
両目を血走らせてコンソールのモニターを睨んでいた転送長が思わず怒声を張り上げ、周囲の部下をびくりとさせた。
だが、転送長は部下の様子には構う事もせず、艦橋に繋がる回線のスイッチを殴りつけるように押し込んだ。
『転送室、艦橋。ターゲットナンバー四七から五五のロックオンシグナルが消えました。ロックオンを阻害する何らかの物質、若しくはフィールドが間に挟まった模様』
「何だって？目標の区画はどこだ、至急知らせ」
転送室から届いた予想外の報告に、ここまでの作業の順調さ故にやや弛緩しがちであった艦橋の緊張感も一気に高いものになった。
『当該区画は第二船倉、船員二名と乗客七名のシグナルが途切れています』
どう言う事だ……
報告を受けた恭也の表情に困惑の色が浮かんだ。
第二船倉は「ユニヴァース」号の船体前方に位置しており、破損して重水素が漏洩（ろうえい）している推進剤タンクや機関部とは距離がある為、遮蔽（しゃへい）物質の介在によってロックオンのシグナルが途切れる事態は考え難い。
これが、推進剤タンクの周辺であれば洩れた重水素がシグナルを遮断したと考えられるし、機関部であればそもそも危険な反物質を抑制する為に厳重な遮蔽フィールドが張り巡らされているから転送シグナルが受信できなくて当然なのだが……

積荷の何かが干渉しているのか、それとも「アースラ」に乗船したくない誰か、もしくは乗船させたくない誰かがそこにいるのか……

教育によって叩き込まれた時空管理官としての勘――というよりも、殆ど遺伝子レベルで持って生まれた戦士としての何かが、そこにただ事ではない「何か」が存在している事を恭也に教えていた。

どうする――

取り敢えず、転送室には転送の順番を組み替え、他の収容可能な人間から収容作業を行なうよう指示を与えておいて、自分自身は専用端末のモニターに船主から提供された「ユニヴァース」号の構造図面を展開させつつ、考え込んだ。

危険だが、誰かを送り込んで調べる必要がある、か……

恭也の思考がそこに辿り着くまで、僅かな時間が必要だった。

とは言うものの、優柔不断と言う言葉とは無縁の存在である恭也の事、一旦方針を決めてしまえば後の思考はすぐに実務面が取って代わる。

問題は、誰を送るかである。

単なる事故であればそれでよし、だがそうでない場合……高度で、且つ柔軟な対応の可能な人間でなければならないことは自明の理であった。

「一番手っ取り早いのは自分で行く事、だが……」

ぼそりと呟いて、ちらりとエイミィの背中に視線を送る。

エイミィの事務・管理能力は疑うべくもないのだが船外作業任務に副長のクロノを割いている以上、上級幹部がこれ以上艦橋を空けるのは宜しくないのは明白だし、そもそも誰もがそれを由とはすまい。

現場での行動力に関しても恭也のそれに疑問を挟む者がいるとはまさか思えないが、それ以前の問題として艦長である恭也は一艦の責任者という以上の判断を時に要求される立場であるが故にここを動く事など許される筈がなかったのだ。

そうすると――考えつつ、脳裏に配下の魔導士隊の顔ぶれを思い描く。

はやてとクロノ……判断力という点では理想的だが、彼

女らには船外任務(EVA)の指揮を執る仕事がある。
なのはとヴィータ……力に頼り過ぎるきらいがあり、デリケートな判断を要求された場合の対応に不安がある。
アルフとザフィーラ……同じく。更に言えば人間とは本質的に基礎体力が段違いの上防御魔法に長けたこの二人は船外任務から外すことは得策ではない。
シャマル……何よりも医官としての仕事の方が優先されるべきだ。
と、なると……消去法で自動的に残ったのは二人しかいなかった。
迷うことなくタッチパネルに指を走らせ、通信回線のスイッチを入れる。
幸いにも、目的の二人は船外任務のローテーションを終えて艦内の待機所に戻っていた。
「フェイト、シグナム。すまんが任務変更だ。至急『ユニヴァース』号に乗船し、転送回収が不可能になった船客と乗組員の救助に向かって欲しい」
恭也の言葉に、一瞬だけモニターの向こうにいるフェイト・T・ハラオウン二級執務官補がおや？という表情を浮かべる。
単に難船に移乗し、転送回収不能区画にいる要救助者を救出し、艦に戻ってくるだけなら魔導士を派遣するまでもない筈だったからだ。
為に、その事についてフェイトが何かを口にしようとしたが、それよりも早く恭也の視線から何か厄介な状況が起こっている可能性がある事を勘良く悟ったシグナム一級執務官補がそれを制する。
『アイ・サー、シグナム一級執務官補およびハラオウン二級執務官補、これより該船に移乗、要救助者の回収を行ないます』
「手間を掛けるが宜しく頼む。船内の状況、見取り図および要救助者のデータは今からそっちの携帯端末(PAD)に転送する。一応、周辺の重水素の回収はほぼ終わってる筈だが局所的に残留濃度の高い場所もあると思われる。十分注意してくれ」
『了解しました。では行って来ます』
そう言うと、シグナムは手早く回線をクローズし、転送室に向かうべくフェイトを促して座っていたテーブルから

腰を上げた。
　気ぃ付けいや、とそのやりとりを艦外でモニターしていたはやての言葉が念話となって二人の耳に届き、微苦笑交じりに解ってます、と応えたシグナムとフェイトは幾らかの疑問を覚えながらもとにかく自らの果すべき責務を果す為に転送室へと向かっていった。

「ドクター……？」
　不意に、隣に座っていた男が口の端を釣り上げてくく、と笑ったのを見た女は僅かに驚いた、だが表情的にはどこまでも落ち着いたままの調子で聞いた。
「いや……なかなかどうして、切れる指揮官がいたもんじゃないか管理局にも」
「はあ……」
「魔導士が二名、それもＡＡクラス以上の技能者を送り込んでくるまでに五分。猪武者なら何も考えずに数だけを即座に送り込んでくるし優柔不断な者ならもっと時間が掛かる。ここにいる我々を除く全員を回収して、しかる後に最良の対応能力を持つ人間を最低限の数だけ送り込む、いやはや、大した奴がいるもんだな……“敵”にも」
　尚も口の端を歪め、冷酷そうな表情を湛えて笑いながら、秘書官らしき同行の女性から「ドクター」と呼ばれた男は楽しそうにそう言った。
「いいだろう、ウーノ。今回はこれで状況を終わろうじゃないか……そして見てやるとしよう、『有能』な魔導士どもの顔を」
　そう言うと、男はポケットに忍ばせていた小さなタブレットケースのようなものを取り出し、その一角を強く押し込んでからさり気なく足元に落とすと、靴の踵で踏み潰して粉々に破壊したのだった。

「あれ……？！」
　再びの異変は、その直後に起った。
「ロックオンシグナルが回復しました。転送収容、問題ありませんがどうしましょう」
　何の予告もなく不意にモニター上にシグナルが復活した事に困惑気味の表情を浮かべながら、転送長が言った。
　問われた恭也も表情に困惑の色を湛えながらも、通信員

の方を向いて乗船班の状況を確認させる。
それに対して返って来た、乗船班の接触まではもう二分と掛らないという答に解った、と応じ、少し考えた後に取り敢えずは転送待機状態を維持しつつ乗船班からの報告を待つと恭也は決めた。

困惑が広がっていたのは、何も「アースラ」だけではなかった。
船倉のバルクハッチを押し開けて、シグナムとフェイトが内部に駆け込んで来たのを見た救助者が一様にその顔に浮かべた表情もまた、救出される事への歓喜というよりは意味不明の困惑の色だったのである。
「時空管理局、第９管区所属警備艦『アースラ』魔導分隊、シグナム一級執務官補並びにテスタロッサ・ハラオウン二級執務官補です。皆様をお迎えに参りました……？」
ハッチを押し開けつつ、要救助者を安心させる為に形式通り背筋を延ばし肘を畳んだ敬礼を捧げながら名乗るシグナムだったが、自分たちに注がれる視線の意味に間もなく気付き、かといって言いかけた言葉を打切る訳にもいかず、結果語尾が疑問形に変化するという奇妙な挨拶を送るという些か間抜けな姿を演じる事となってしまった。
「あ、ああ……ご苦労様です。えと、その……こういう事を申し上げるのは大変恐縮なんですが、我々はてっきり転送で収容されると思っていたんですがお二方がお見えになられたということは状況が変わったんでしょうか？」
全員を代表し、シグナムの前に進み出て左手を差し出したパーサーが、やはり困惑の表情を浮かべたままで聞いた。それで初めて、ロックオンシグナルの途絶が「アースラ」側のみで発生したトラブルであったようだと漸く合点が行った。
「乗船班、『アースラ』。要救助者全員の無事を確認。これより転送願います」
『“アースラ”了解。ご苦労さん、すぐ転送するからちと待ってくれ』
「乗船班了解」
シグナル途絶の原因を探るのは取り敢えず後回しにして、「アースラ」との間に簡潔にやりとりを済ませたシグナムはちらりと、だがなるべく不快感を与えないよう気を配り

ながら転送を待つ要救助者全員の顔を等分に眺め渡した。
（船員は五〇代及び二〇代男性各一名、乗客は五〇から六〇代男性三名、二〇から三〇代の男性二名、四〇代及び二〇代女性各一名、というところか……ん？）
乗客の顔を見回しながら、不意に軽い違和感に襲われるシグナム。なんだろう、と思いつつ改めてもう一度一人一人の顔を見直してみる。
と、シグナムの視線に混じる光の意味に気付いたらしい、三〇歳前後と思しき男がすっ、と立ち上がると神経質そうな険のある視線でシグナムをねめつけながら「何か？」と聞いて来た。
それは、先程傍らの女性から「ドクター」と呼ばれていた男だった。
「ああ、いえ……思いのほか皆さんが落ち着いていらっしゃるから感心していただけです」
「ほう……それはそれは」
言いながら、悪びれる様子もなくつかつかと歩み寄ってくる男。
「それにしても何ですなあ……こんな大事な状況下で不具合が発生する転送装置、いやはや、大した装備をお持ちですな時空管理局さんは」
露骨な軽蔑の視線と共に言い捨てるドクター。あまりの言い様に周りにいた何人かが抗議の声を上げかけるが、同時に口には出さないまでも同じような事を考えた者もいたらしい、ドクター自身の物も含め数本の刺すような視線に射貫かれて押し黙ってしまう。
「まあそれも仕方ない事かも知れませんがね、貴方方に取っては時空遺失物回収や魔導犯罪捜査なんて派手な仕事の方が余程昇進の為のポイント稼ぎになる。反対に、こんなポンコツの貨客船救助なんて危険の割に点数稼ぎにはならない仕事だ。どっちに力が入るかなんて自明の理、ですわな」
反論は許さん、といった調子でねめつけるように言うドクターの顔を尚も見据えながら、腹の奥底からこみ上げてくる怒りを必死で封じ込めつつ、だが、その冷酷かつ酷薄そのものの視線の奥に別の色がある事を見出して、それの意味する事に気付いてシグナムの意識は急速に醒めた。
この男――我々を試している。だが、何の為に？

疑問を巡らせる事でこの男を殴り倒したい欲望が脳を支配する事を抑制しながら、シグナムは黙って佇立したまま男の言うことに口を挟むことはせず、あえて言うに任せていた。

男の言っている事、その一つ一つを取ればこういった危険な状況下で極度のストレス環境に置かれた要救助者が見せるよくある反応に過ぎない。

だからこそ、普段から管理官達はこうした罵詈雑言にも黙って耐えられるよう徹底した訓練が施されていたし、実際場数を積めばこの種の悪罵に身を晒す羽目になるのも一度や二度では無い。

そもそも、大抵の場合は助かったという安堵感とそれまでに蓄積された極度のストレスが原因となって理性の箍を外してしまうが故の無意識の暴言が殆どであり、事実大抵の救助者は後日正気に戻って申し訳無さそうに恥じ入った調子で詫びを入れてくるのが殆どだったからだ。

実際、この時シグナムに詰め寄るドクターの様子もそうした事例の一つにしか見えず、よってフェイトもこの場で仲裁に入るのは返って藪蛇と思いシグナムに対応を任せるつもりで傍観者に徹していたのだった。

だが――

そうではない、とシグナムが感じたのは、普通この種の「キレ」た糾弾者の目というのは純粋な怒り以外の色を浮かべていないのが殆どなのだが、この時のドクターの目には全くそれが存在せず、それどころかむしろ極限まで醒め切った、計算された理性の下に彼がいる事を雄弁に物語っていたからだった。

ひょっとしたらこの男、所謂「プロ市民」――彼女達が普段生活の場を置いている世界における「良心的反体制市民運動家」の事。インターネットを通じて広がった蔑称で、身内の中でも特にこうした事柄に造詣が深い、月村すずかから教えられた言葉だった――なのかな……そんな考えも頭を過りはしたものの、一方でやはり「プロ市民」なら半ば狂気と言っていい独善の色に染まった瞳の持ち主が殆どだから、それとも違う。結局はやはり何らかの目的意識を持って故意に罵詈雑言を浴びせているとしか思えなかったのである。

ではどうするべきか――

敢えてこの男の挑発に乗り、反応を見てみるべきだろうか――

そう思い、何かを口にしようと改めてドクターの方に向き直ろうとした途端、胸元の通信機がピーピーと呼び出しのアラームを奏で始めた。

「乗船班、『アースラ』」

『“アースラ”転送室、待たせたな、転送パッドの再チェック終了。今から転送を始める』

「了解。宜しく頼む」

口論――と言うよりも一方的に捲くし立てるドクターのせいですっかり醒め切っていた空気を和らげる為、全員に聞こえるようかなりはっきりした声でやりとりを行なったシグナムは、それによって生まれたドクターを除く全員の表情が安堵のそれである事を認め、「皆さん、お待たせしました。これより全員を『アースラ』へ転送します」と告げた。

「ふん……まあ精々、再度のトラブルで素粒子のまま転送バッファに取り残されるような真似はしないで戴きたいもんですなあ」

さすがに、空気があからさまに変わった事を明敏に察したのか、最後にシグナムの目にひと睨みをくれて吐き捨て連れの女性の元へ戻って行くドクター。

何人かが「おいおい、幾ら何でも言い過ぎだろそりゃ……」と控えめに非難の声を上げたが、立ちどころに射すくめるような冷酷且つ侮蔑に満ちた視線をドクターから叩き込まれて沈黙を余儀なくされる。

その様子に、ひょっとしたら自分の思い込みが過ぎたのかもしれないと感じたシグナムは、やれやれと肩を竦めながら傍らに戻ってきたフェイトに視線を送ると、フェイトもそれに応えて小さく首肯きを返し転送に問題のない事を確認して再度通信機の送話スイッチに指を掛け、「やってくれ」と呟いたのであった。

「シグナム執務官補及びフェイト執務官補、要救助者九名、全員の転送収容、終わりました」

「重水素回収班、流出重水素五〇トン中回収可能な四四トンの回収作業を完了。現在一号艇及び二号艇収容作業中です」

「船外作業班、八神執務官補。船外作業班の任務終了、艦内に戻ったわ」
各所から任務完了の報告が続け様に届き、どっと「アースラ」の艦橋が任務達成の歓喜に沸いた。
「みんなー、お疲れ様。艦長もご苦労様でした」
歓喜に沸く艦橋の中で、全員を代表して艦長席を振り向いたエイミイが言った。
「ああ、だが『ユニヴァース』号の自沈作業と危険海域からの脱出が残ってるぞ、その科白はもう少し後に取っとけ」
元からの性格と、艦長としての立場の両方から手放しでは歓喜の輪の中に入れない恭也が、それでも少し表情を緩めながら言葉を返すと、この二ヶ月で恭也の性格を掴んできた乗組員達の微苦笑が漏れる。
だが、間もなくしてそんな弛緩した空気を吹き飛ばすように控えめに、だがはっきりとした口調で気象観測士が気象レーダーを覗きながら怒鳴り声をあげた。
「あー、お喜びのところ申し訳ない。新たなエネルギーストリームの発生を検知。スケールⅨ、今までで一番規模のでかい奴です。これを食らうのはまあ正直あんまりお薦め出来ませんね。自沈処理を急ぎ、この場を離脱する事を進言します」
「解った、『ユニヴァース』号の処分作業に入る。インパルスエンジン推力一〇分の一、艦を水平に戻しつつ左回頭、下流側に回り込みつつ艦首を難船に相対させろ。アルカンシェル、発射準備」
「アイ、インパルスエンジン始動。推力一〇分の一。左回頭にてストリーム下流側に回ります」
「主砲アルカンシェル、射撃準備始め」
観測員の報告を受けて恭也の命令が飛ぶと、立ちどころに艦橋を覆っていた弛緩した空気は吹き飛ばされ、再び緊張感に満ちたぴんと張り詰めた空気がその場を支配し始める。
「中型船の処分作業ですから最大出力までは必要ありませんね。計算では出力八〇パーセントで十分目標を消滅可能です」
「了解、念の為だ、余裕を持ちチャージは九〇パーセントで行け。慣性制動器はスイッチをカット、目標消滅の確認

と同時に一六点回頭、発射反動による後退を初期加速に利用しつつ、最大ワープで離脱する」
「アルカンシェル、共鳴エネルギーチェンバーへのエネルギー充填は九〇パーセント、アイ。初期加速に備えワープリアクターへもエネルギー充填を実施。エネルギー増幅コンデンサー、一番から六番までをアルカンシェル、七番・八番をワープリアクターに振分けます」
「闇の書」事件や「愚連艦隊」事件の時とは異なり、全力射撃を行なう訳ではないから発射準備の作業のピッチも早い。
また、過去二度の発射とは異なり失敗の許されない状況での使用ではないせいか、思ったよりも落ち付いたなかでの発射準備が進められた。
だが、思わぬ事態はそんな状況下でこそ絶えず発生するものだということを間もなく誰もが思い知る事になった。
『ラウンジ、艦橋』
「艦橋だ、どうした」
『はあ……それがその、“ユニヴァース”の船長がフネを沈めるなら、自分で引き金を引かせてくれと言っておりまして……』
心底困り果てた調子のラウンジからの報告に、恭也の目が険しくなり、クロノははあ、と溜め息を吐いて頭を抱えた。
『どうしますか？』
モニターの向こうで自分では扱い切れない、そっちで返事してくれと暗に仄(ほの)めかしている、困り果てた表情を浮かべる接待役(ホスト)の若い保安科員(ガード)に少し待て、と告げると、恭也はクロノ、続いてエイミィに視線を投げかけた。
その視線の意味に気付いて、クロノは「お手上げ」と言う風に肩を竦め、両手を軽く広げて左右に揺すり、エイミィは右手を延ばしてダメダメ、という風に左右に振った。
当然と言えば当然の事で、規則云々の問題以前にアルカンシェルの最終撃発回路は艦長自身の生体情報(バイオメトリクス)無しでは起動しない、つまり、艦長以外の誰も発射出来ない仕様になっているのだ。
だから、二人が示したゼスチュアの意味を明敏に悟った恭也は小さく首肯いただけで再びモニターに向き合い、小

さく首を左右に振ってみせた。それで、意思は十分伝わった筈だ。

そう思い、スイッチをオフにしようとした矢先、再びモニターの向こうで慌てふためいた声が上がる。

『あちょっと待って……なにやってんすか……って、だから出ちゃ駄目って言うか、艦橋に行っちゃ駄目って言ってるでしょうが……あああ……』

一体何が起ったのか、考えるまでもなかった。

はぁ、と盛大な溜め息と共に黙ってスイッチをオフにする恭也。

そして、再び正面に向かいあうと、「仕方がないな……船長が来る前に終わらせよう。アルカンシェル、八〇パーセントで撃つぞ……破壊しそこなった残骸があっても波が押し流してくれるだろ……」と心底情け無さそうに宣言したのであった。

結局のところ、恭也の判断は正しく、艦橋に通じるハッチの手前で「ユニヴァース」号の船長と保安科員とがすったもんだしている間にアルカンシェルは発射され、最早自力で時空の海を駆ける力を失い最期の時を従容として待っていた老朽定期貨客船を直撃し、これ以上の嵐の暴力に身を晒す苦痛から彼女を永遠に開放してやったのである。

とはいえ、恭也も決して冷酷非情ではないから、発射された超重力弾が命中する直前にハッチを開ける許可を出し、船長を艦橋へと招き入れてせめて乗り慣れた愛船の最期を見届ける機会だけは提供した。

超重力に捕われた「ユニヴァース」号の船体が奇妙に捩じれ、自壊しつつ圧縮され、最後に巨大な爆発の閃光と共に消滅する過程をがっくりと項垂れたまま眺めた船長は、爆発の余韻が収まるまで暫しそのまま呆然とし、やがて保安科員に促されると軽く片手を上げて退出していった。

その様子を見て、少しフォローの必要はあるか、と感じて後の指揮をクロノに任せ席を立とうとした恭也だったが、結局それよりも先に機関室からの呼び出しシグナルがコンソールに踊り、ほんの僅かに椅子から腰を上げただけで再び席に戻る事になってしまった。

そしてそれっきり、速やかに艦を危険海域から離脱させ

る為に目も回るような忙しさで操船指揮を執る必要から恭也が艦長席を離れる機会は完全に奪われてしまった。
尤も、恭也がこの事に付いて気を揉む必要もまた、それ以上はなかったのだが――
保安科員の慰めの言葉を殆ど上の空の状態で聞きながら、救助者に割り振られたラウンジへ戻って尚塞ぎ込んだままの船長の様子を見かねて、危険海域を無事に脱した後、総員配置の解除と被る形で直が明けた機関長がラウンジを訊ね、彼に声を掛けたのであった。
「あんたのとこの艦長、若い割に出来るようだがもうちょっと人の心って奴を理解出来るようにならんと駄目じゃないかな」
後は任せろ、と言いたげにはらはらしながら成り行きを見守っていた保安科員に小さくウィンクして見せた機関長は、そのまま船長を連れて目視窓のある外殻通廊（アウターデッキ）の一つに出ると、ポケットに燻（くすぶ）めていた小さなボトルを投げ渡してやりながら暫く愚痴聞き役に徹してやった。
「まあな、確かに俺らも若いな、って感じることは時々あるよ。だが、うちの艦長はああ見えて、若造とは侮れん人だ」
五分ばかり、船長に好きに喋らせてやってから、漸く一息着いたのか喋り疲れた船長がボトルの中味を三分の一ほど一息に煽り、それを機関長に投げ返すのを受け止め、自分も栓を開けて軽く煽る。
「……ああ、だが、まだ自分の船を失う苦しみだけは……経験したことないだろう？船乗りにとって自分の船を失う事がどれほどの事か、解る人間ならあんな態度は取りやしないさ」
余程、自分の船の最期を自らの手で締め括ってやれなかったのが悔しいのだろう、アルコールと悲しみと、そして僅かな怒りを瞳に込めて船長は吐き捨てた。
「そうでもないぜ……船を失う痛みなら艦長は十分に知ってる」
半分ほどに中味が減ったボトルを弄びつつ、胸ポケットから煙草のパッケージを取り出して一本咥えながら、諭（さと）すようにというよりも問わず語りのように機関長はぽつりと呟き、そしてゆっくりと話し始めた。
四年前の、ごく短いが強烈な印象に残った日々の事を――

―

あの、異世界の星の海を奥築城（おくつき）として永遠の眠りに着いた老警備艦（フォートレス）の事を――

三日後――

当初の予定より二日遅れで母港、アーシア軌道港（ステーション）の管理局専用埠頭ではなく民間船パースに接岸した「アースラ」から「ユニヴァース」号の救難者達が退去する際、「ユニヴァース」号の船長は最初の非礼を恥じるかのように何度も礼を恭也に述べた。

齢ももう五〇の半ばを過ぎ、下っ端の甲板員（デッカー）からずっと三〇年以上も寝食を共にし乗り慣れてきた船も永遠の過去へと去った事で、寧ろ陸（おか）に上がるいい潮時を見付けたと少し寂しげに、だが明るい声で告げて舷梯（タラップ）を降りてゆく背中を見送りながら、報告書の束を持って艦橋（ウィング）の張り出しに顔を見せた機関長に、恭也は「ありがとう」と小さな声で、だが心からの感謝を込めて告げた。

「なに、いいって事です……オヤジにゃあオヤジの方が話が合う場合もあるんでね」

そう言って、その科白が聞き方によっては恭也の年齢的な若さを咎（とが）めるようにも聞こえなくない事を悟り、「ああ、こりゃ失敬」と軽く頭を掻いた機関長は、少しばつが悪そうにキョロキョロと周囲を見渡し、折よく自分と同じように報告書を纏めて艦橋に上がってきたエイミィの姿を目ざとく見つけ、にんまりと少々気味の悪い笑みを浮かべてそちらに近づくと、全く悪びれる様子もなく「よ、航海長もお疲れさん」と告げるや否や後手に隠し持っていた報告書をエイミィが抱えていたそれの上へとドカドカと積み重ね、開いた手をひらひらと振りながらハッチの方へ足早に進んでいった。

「ああそうだ艦長、今日は確かお嬢さんの誕生日だったんじゃねえんですかい？後のことは航海長が万事やってくれるって言ってますから、今日は妹さん連れて陸に上がったってくだせえ……オヤジの務めを果たしに」

ハッチの縁に片足をかけ、エイミィとも恭也とも十分に距離が離れた事を確認して、おもむろに背後を振り向くと機関長は大声でそう言い、エイミィが抗議の声を上げるよりも早くがはは、と豪快に笑いながら今度は振り返る事を

せず、急ぎ足で艦橋を立ち去っていった。
　まったくもう……とぶつくさぼやきながら倍の高さに膨らんだ報告書の山を、今度はクロノのコンソールの上にどっさりと積み上げるエイミィ。
「ああそっか……雫ちゃん、もう三つになったんだね。艦長、クロノ君が上がってくる前に行って下さい。報告書の整理が済んだらクロノ君連れてお祝いに行きますから」
「ああ、有難う。そうさせて貰うよ」
　機関長やエイミィに示された好意に感謝を示しつつ、恭也は足早に艦橋を立ち去った。途中、なのはにも一報を入れ、艦長艇の格納庫前で合流し、地上――海鳴へと向かう艦長艇上の人となる。
　間もなく、艦長艇が艦から切離され、通常空間へと繋がる人工ワームホールに向けて舳先を巡らせるのを確認してなのは達がいる後部キャビンに戻った恭也は、彼女達の上げる賑やかで明るい笑い声と微かなエンジンの唸りに耳を傾けながら、シートに腰かけると間もなく瞳を閉じ、地上に着くまでの短い間、こみ上げてくる微睡みの誘惑に抗う事をせず黙って目を閉じた。
　四年前の自分からすれば予想するのも不可能な程大きく変わってしまった自らの人生――
　夢と現実の境界線上に朧げに浮き沈みしながら、恭也の記憶は一日ごとに思いを馳せずにはいられない複雑に螺旋を描き過ぎ去っていった日々へと帰っていった。